

陳舜臣さんを語る会通信

NO.105 Jun. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2023年6月1日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

日中往還、中国歴史拾遺ほか エッセイ14編『随縁護花』 / 陳家の墓の家紋

本号ではエッセイ集『随縁護花』（1995 尚文社ジャパン）を紹介いたします。（編集委員 橘雄三）

巻頭「解題」

傍線は編集委員の加筆

迎春

迎春

情多材薄乏奇功 情多きも材薄く奇功に乏し

結夢寄生不作叢 夢を結び生を寄せて叢を作らず

怕看山間新曆日 看るを怕る山間の新曆日

嗟嘆吳下舊阿蒙 嗟嘆す吳下の旧阿蒙

徒繡雜籍三千卷 徒らに繡く雜籍三千卷

寧紙春酸一點紅 寧ろ紙めん春酸一点の紅

褒貶等閑風雪度 褒貶 等閑して風雪度り

隨縁六甲護花翁 縁に随わん六甲護花の翁

六甲山房庭

六甲山房庭に

有臘梅。

臘梅有り。

（陳舜臣『澄懷集』より）

たしかに私は情熱過剰なところはあったようだが、たいした才能もなく、これまでめざましい仕事もしていない。夢見がちで、他人に頼ることが多く、大きな業績を積み上げることがなかった。新年になって「蘇東坡の句の「老い来れば新曆日を見るを怕る」をしみじみかみしめ、自分もこの六甲山房で新しいカレンダーをみるのをおそれているのに気づく。『三国志』の呂蒙は、短期間に「吳下の旧阿蒙に非ず」と旧知の人たちを驚かせるほど学識を積んだが、なさけないと嘆くのは、ちっとも進歩しない自分のこと。私は雑多な書物を、いたずらにたくさんひもといてきた。だがそうしたことは、一度の

劇的な経験にも及ばないのではないだろうか。庭の臘梅をみつめてそんなことをおもうともあれ、毀譽褒貶は度外視して、長いあいだのつらいことも乗り越えてきたのである。こうしたことも縁であり、私はそれにさらわすに、ここで人生の花を護るじいさんとして生きて行きたい。

清の龔自珍（一七九二—一八四一）に、

「落紅は是れ無情の物にあらず、化して春泥と作り更に花を護る」という表現があり、私の好きな句である。

補足（一）■『随縁護花』掲載の「迎春」には、活字にない字があるので、『天空の詩人李白』所収、「澄懷集」を引用した。

補足（二）■「解題」の意味だが、著作者等の伝記、執筆や編纂の動機や経緯、著述の由来や書誌的な来歴、内容や特徴、書名、出版事項などをその対象とするのが一般的である。ここでは、書名について述べている。



表紙

右の表紙、カバーデザインは陳幼芳 となっている。陳幼芳とは、陳舜臣さんのご子息・立人氏ご夫人（陳芳子様）のペンネームです。

『随縁護花』初出一覧

第一部 日中往還 《テレビ講座NHK市民大学 1986年3月31日～4月4日》

第二部 中国歴史拾遺

《漢帝国の西域経営 現代視点・中国の群像『張騫・李陵』1985年8月旺文社》

《諸葛孔明の時代と舞台 現代視点・中国の群像『諸葛孔明』1985年1月旺文社》

《ジンギス汗の拓いた時代 現代視点・中国の群像『成吉思汗』1985年3月旺文社》

《歴史の交差路シルクロード『プレジデント』1992年3月》

第三部 中国詩人列伝《西域・黄河名詩紀行 1987年9月～1988年1月日本放送出版協会》



『西域・黄河名詩紀行』
第一巻「岑参」が掲載

『随縁護花』 第一部内容 及び補足

	題	第一部内容 ■はキーワード
第一部（日中往還）	第一章 東海扶桑の国 《伝説世界の人影》	秦の始皇帝の時代、暴政を逃れて渡海した人たち、グループが、日本の縄文から弥生への交代をもたらしたのではないかと ■江上波夫の騎馬民族説 柳田国男の南島説 徐福 梅福 漢委奴国王印 魏志倭人伝 倭の五王、南朝・宋に遣使
	第二章 帰帆但だ風に信す 《遣唐船が運んだ人々》	大化の改新(645)は古い硬直した渡来人の勢力を、新しくやって来た「今来」の渡来人の力を持って打倒するという意味があったのではないかと。遣唐使は、季節風とか、わりに条件の悪い時期に船出をしていることが多い。これは、宮廷陰陽師が日取りを決めたからではないかと ■遣隋使 高向玄理 白村江の戦い 遣唐使 阿倍仲麻呂 鑑真
	第三章 入唐求法の旅 《海を越えた僧侶たち》	空海は仏教の教義、そしてそれを大衆に説くための最新の方法を求めて入唐した。その前には、道璿(せん)及び鑑真を日本に来るように運動した栄叡及び普照がいた ■青竜寺の恵果 円仁「入唐求法巡礼行記」 普陀山を開いた慧萼(えがく) 寧波
	第四章 反清復明は遠く 《明朝の遺臣たち》	16世紀前半の日中関係において、倭寇が大きな問題。日本は当時、戦国時代。一方、大内氏、細川氏など西国大名による遣明船(勘合船)が寧波へ。1644年、時代は明から清へ ■新安商人 王直 戚継光 豊臣秀吉の朝鮮出兵 万暦帝 明の十三陵 李自成 鄭芝竜 鄭成功 隠元、宇治に黄檗山萬福寺を開く 朱舜水、徳川光圀に招かれ水戸へ
	第五章 一衣帯水をめざして 《近代の亡命者と華僑》	日清修好条規(1871年調印、73年批准)により、日中の外交始まる。1877年、初代駐日公使何如璋、書記官黄遵憲ら来日。1894、95年日清戦争(下関条約)。1898年、戊戌政変で、康有為、梁啓超ら日本へ亡命。当時、日本には孫文も。日本は革命の基地。1904、05年日露戦争。1912年1月、中華民国成立、孫文臨時大總統に。2月、袁世凱、宣統帝退位を実現させ臨時大總統に(→大總統→皇帝→1916年死)。孫文、1924年、神戸で「大亜細亜主義」講演、25年死去。蒋介石率いる国民革命軍、1928年、北京入城 ■日清戦争賠償金、清国総年収の3倍 二十一カ条要求(1915年) 中華会館(神戸)



陳舜臣さんにとって、徐福は自家薬籠中のものといえる。いくつもの作品で言及され、私(橋)も何度か補足をしてきた。今一度、練り返そう。ただ、画像は未使用のものを使用。

二〇〇五年一月二日、既に公職を退かれています野の研究者、張良群氏の案内で、教え子の王賢と私は徐福村へ出かけた。徐福村、つまり、江蘇省連雲港市カン楡県金山鎮は連雲港市街地から車で北へ一時間ほどのところ、山東省との省境近くにある。

金山鎮では、共產党金山鎮委員會の張永信書記の歓迎を受ける。張書記も一緒に、車を連ね徐福祠へ。



上の画像、焼香炉に「徐福祠」の銘
右の画像、徐福茶楼でくつろぐ張と
二人と教え子

第一部第一章「東海扶桑の国」補足

第五章「一衣帯水をめざして」補足



黄遵憲の故居、入境廬

何如璋と黄遵憲のふるさとに近い。福建省から広東省に入つてすぐの大埔が何如璋の、更に進み、大きな都市、梅州が黄遵憲のふるさとで、二人はともに客家である。

(画像は編集委員撮影)



何如璋のふるさと大埔近く三河の風景
この辺りで、梅州から来た梅江ほか、三つの川が合流し韓江となる

一八七七年、初代駐日公使何如璋、書記官黄遵憲らが来日した。

書

『随縁護花』第二、三部内容 及び補足 ■はキーワード

第二部（中国歴史拾遺）	漢帝国の西域経営	漢の武帝(在位前141～前87)時代の対匈奴対策を記述。遊牧騎馬民族の匈奴と戦うには名馬が必須。匈奴の力が衰弱した大きな要因は内訌 ■羈縻(きび)政策 大宛 月氏 張騫(ちょうけん) 李広利 冒頓单于(ぼくとつぜんう) 衛青 霍去病(かくきよへい) 李陵 司馬遷 西域都護
	諸葛孔明の時代と舞台	後漢12代、希代の暗君といわれる霊帝の時代。宦官と士大夫の反目が強まるなか、宦官優勢の時代であった(党錮の禁)。霊帝治世の184年、黄巾の乱がおこる。この乱の平定に活躍した人たちが軍閥化し、混戦しはじめ『三国志』の幕が開く。ところで、劉備が、一度も会ったことのない諸葛孔明にどうしてそれほど惚れ込んだのか… ■曹操、孫権の出自 赤壁の戦い 天下三分の計 関羽の吊い合戦 北伐 出師の表
	ジンギス汗の拓いた時代	遊牧民の生活環境は定住民のそれよりもはるかにきびしい。掟を守ることは、生死の問題につながり、それをみだした者は厳罰を受ける。遊牧民はつねに絶対的な独裁者に指導されている。ジンギス汗は超弩級の独裁者にほかならない。元は漢文化に同化されなかったが、そのかわり、モンゴルの痕跡をほとんど残さずに、中国から去った。伝統的中国からみれば異質の時代であったが、それだけに歴史の教訓の豊富な時代といわねばならない ■燕雲十六州 金 南宋 岳飛 秦檜 長春真人 耶律楚材 「授時暦」
	歴史の交差路シルクロード	日本人のシルクロード熱は異常なほどに高い。玄奘三蔵をはじめ、マルコ=ポーロ、スウェン・ヘディンら、この土地に命を賭けた男たちの名にも馴染みが深い。人はなぜシルクロードに惹かれるのだろうか ■中島敦『李陵』 王昭君 張騫とその従者・甘父 匈奴とは民族の名? 政権の名? フン アッチラ 塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』 江上波夫『騎馬民族説』 ジンギス汗 冒頓单于 『元朝秘史』 タラスの戦い 高仙芝 鄭和 法顯 鳩摩羅什 カレーズ 安西都護府
第三部（中国詩人列伝）	岑参 西域をうたった詩人	しんじん 715～770、盛唐の詩人。「辺塞詩人」で、西域をうたった詩が彼の花 ■高仙芝 タラス河畔の戦い(751) 安祿山、洛陽を陥し、長安にせまる(755)
	李白 天空を翔ける詩人	701～762、盛唐の詩人、字は太白。天空を翔ける詩人李白。地上をとぼとぼ歩くタイプの杜甫は李白に羨望をおぼえたにちがいない。本通信No.59参照 ■「飲中八仙歌」
	杜甫 黄河っ子の遍歴	712～770、盛唐の詩人、洛陽の東、鞏県の人。陳舜臣さんは、杜甫は「黄河っ子」であるが、「私自身の好みとしては、長江圏にはいつてからの杜甫の詩のほうが好き」とおっしゃる
	王昌齡 「芸術的生活」	698～755頃、盛唐の詩人。放漫な性格のため、官僚としては不遇におわった。閨怨の情を主題とする七言絶句にすぐれるが、辺境従軍の詩や送別の詩にも佳作が多い
	白居易 俗をめざした大衆詩人	772～846、中唐の詩人、字は楽天。ここに取り上げられた他の4人と比べ一世代遅い。在世中に、日本にすでにその文集が伝えられた。現存する詩の数は、唐の詩人のなかで最多

第二部「漢帝国の西域経営」補足

西安から渭水を渡ると咸陽。咸陽から、さらに西へ十五キロ。一面、とうもろこし畑の向こうに、小山が一つ、そして右手遠く離れて、ずっとずっと小さい小山が二つ三つ見えてくる。茂陵(武帝の陵墓)と陪塚(近親者や従者の墓)である。

生存中に造る陵を寿陵というが、武帝は即位の翌年から寿陵を造り始める。死ぬまで実に五十三年にわたって、毎年、国民総生産の三分の一を陵墓造営に投入し続け、死んだ時にはすでに財宝が満ち満ちていたという。

この茂陵の東には、霍去病、衛青など重臣の墓がある。この二人は、共に、対匈奴戦を成功させた將軍である。とくに霍去病は有名。彼は十八歳で叔父衛青の匈奴討伐軍に従ってより、驃騎將軍として数々の大功をあげ、武勇の声望高く、武帝の寵をあつめたが二十四歳で病死した。武帝はこれを悲しみ、建設中の茂陵の傍らに墓を造らせ形を彼が大功をたてた祁連山に似らしめた。



霍去病の墓



霍去病墓碑「漢驃騎將軍大司馬冠軍侯霍公去病墓」



茂陵

陳家の家紋は卍？ 卍のはず 『走れ蝸牛』『家紋』より

『走れ蝸牛』『家紋』より抜粋引用

傍線は編集委員の加筆

『走れ蝸牛』『家紋』より抜粋引用 します。

私の祖父は昭和七年に世を去った。もう一族は神戸にいたので、神戸に墓をつくることになったが、石工は家紋を彫らねば、「恰好がつきません」と主張した。「中国には家紋などはありません」と言うと、「では、なにか適当に彫っておきましょう」と、かなりいい加減なものだ。

石工が我が家の墓のために、みつくりつてくれた紋がマンジであった。これならお寺の紋ではあるし、普遍性があると考えたのであろう。じつさに、「五つ割マンジ」とか、「ねじマンジ」といった家紋がある。私の父は、既成の日本の家紋を用いるのに抵抗があったらしい。「養子になるわけじゃなし」という気分上の問題なのだ。日本にまだない家紋にこだわった。父の意見をきいた石工は、「じゃ、マンジを逆にしましょう。これはないはずです」と、知恵をいれた。

こうして、祖父の墓に逆マンジが彫られた。アドルフ・ヒトラーがドイツで政権を掌握したのは、私の祖父の死の翌年のことである。私の父もくだんの石工も、逆マンジがナチスのシルシであることを知らなかったのだ。孫の七五三の衣裳で家紋が、五十数年ぶりに我が家の問題となった。まさか逆マンジは使えない。我が家の庭に桐があるので桐にした。ま、家紋などはそんなふうにしてできたのだ。

失礼ではあるが、なんとも愉快な話である。私(橘)は、陳舜臣さんの作品を読んで、陳家のお墓

が追谷墓地にあることは知っていた。

追谷墓地は、JR元町駅の東口を出て、鯉川筋を北上、海外移住と文化の交流センターの裏手を登ったところだ。

『残糸の曲』にも次のような詳しい記述がある。

在留中国人のために、神戸には『中華義荘』という専用の墓地がある。(中略)修平の父も、とうぜんその中国人墓地に葬られるはずなのだ。ところが、義母が猛烈に反対した。(中略)彼女によれば、仇敵の家庭の墓のそば近くに埋葬されると、夫は死んだあとも争わねばならず、その魂がやすまらないという。(中略)

では、ふつうの日本の墓地にしようということになり、義母は石碑店に紹介された追谷墓地に墓を建てるつもりだった。北野町の家から車で行けば、五分もかからないのも魅力であつたらしい。修平はいま秀琴の案内で、そこを見に行こうとしているのだった。追谷墓地には、ごくすくないが、中国人の墓もあった。有名な亡命画家胡鉄梅の墓もそこにある。(中略)

追谷は六甲山系のうちの一つの谷で、(中略)正面は左右から山塊がまじわって、そのすきまに、神戸の街の一部が、早春の陽光をうけて、松の枝のあいだにうかんでいるように見えた。

私は一度、右の文中記述の胡鉄梅の墓地を探して追谷墓地へ行ったことがある。胡鉄梅の墓はなんとか探し当てることが出来た。追谷墓地の十六区だ。

ただ、陳家の墓については、あまり、個人のプライバシーに深入りするのは気が引け、探さなかったが、陳家のルーツが中国の中

原、^{えいぞう}鯉川であること、陳舜臣さんが三十三世であること、そして、逆マンジのことと、遠慮が好奇心に負け、ご親族にお墓の位置をお訊きした。そんなことがあって、今回、陳家のお墓との対面となった。ここに報告することについてご容赦願いたい。



墓地、登り口

左の画像は陳家のお墓。祖父、恭和氏が「三十一世祖」という文字は墓碑の裏面に確認。特に気になっていた「鯉川」の文字及びマンジがはつきりわかる。「エエッ!」、これは、お寺の記号のマンジで、逆マンジではない。この部分だけ石材が新しい。作り変えたよう。

